

Road to 2020

第6回

女子ユースハンドボール 世界選手権に帯同して

— リオデジャネイロ五輪の興奮も緩やかになってきました。日本選手団は金メダル12個を含む計41個のメダルを獲得し、2020年東京五輪への機運がますます高まっています。リオでは27種目の競技が開催され、日本選手団はそのうち26種目に選手を派遣しています。唯一選手を派遣できなかった競技をご存知でしょうか…。そうです、我がハンドボールです…。東京五輪では、開催地枠としての出場が現時点では濃厚で、そこに向けての強化にいち早く乗り出しております。

今年度も女子ユースチームのドクターとして、スロバキア・ブラチスラバで開催された第6回女子ユース世界選手権に参加する機会を頂戴しました。スロバキアがどこにあるかご存知ですか？ ブラチスラバはウィーンからバスを用いて1時間でいくことができます。オーストリアは風力発電が盛んでして、その移動中は多くの風車が立ち並び田園地帯を通り抜けていきます。ガイドさんに尋ねると風車があるところまではオーストリアですよとのことでした。オーストリアを抜け、ドナウ川を越えるとすぐにブラチスラバに到着します。たいへん小さな街ですが、東欧の情緒あふれる素敵な都市でした(マリアテレジアも居住したブラチスラバ城)。街中にはいたるところにオブジェが作られており、散策するだけで楽しい街です(写真はマンホールから出ているおじさん)。



さて、帯同医師の役割として、衣食住環境を整えることが病気の防止に不可欠です。住環境としては、現地の気候は日本よりも気温、湿度ともに快適でありとても過ごしやすい気候でした。しかしながらホテルの床清掃が不十分であり、選手1名と私が喘息のような症状が出てしまい、ホテルへ清掃の徹底を依頼し、また寝る時のマス



ク着用も選手に伝えました。あらためて環境整備の大事さを学びました。

食環境については、事前の調査でも水は悪くなく、生活用水については水道水の使用が可能でした。また食事においても生野菜、フルーツが多く準備されており、選手スタッフともに積極的に摂取できました。ただ肉(牛、豚、鳥)料理や油での調理が非常に多く、お腹には負担が強いと思われました。主食については、ライス、パン、パスタとでてきましたが、ライスが塩で味付けされており、日本人には不向きでした。日本から日本食、米、炊飯器をもっていき、試合後におにぎりを準備して乗り越えました。

練習、試合を通じたケガについては、海外選手との体格差、戦術に起因する接触性外傷・疲労に伴うものを認めました(写真は負傷した選手のもとに駆け寄る私)が、大会を通じて元気にプレーをしてくれました。

国際大会の登竜門でありますユース世界選手権を見ていると、国を代表するという意識が他国に比べると弱いのではないかという印象がぬぐいきれません。『心技体』という日本のスポーツ文化において大切な言葉があります。この3つの総和がパフォーマンスに直結するものであると考えられています。これは心・技・体をそれぞれ一つずつ鍛えていくべきものではなく、この心技体一つのものとして育てていく必要があると考えられています。これはスポーツに限らず、何かを成し遂げるには必要なことですね。

最後になりますが、17日間の遠征のなか、不在をお許しいただきました患者さん方、送り出してくださった三重病院のスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。また来年もすみません(笑)。

(小児科 貝沼 圭吾)

